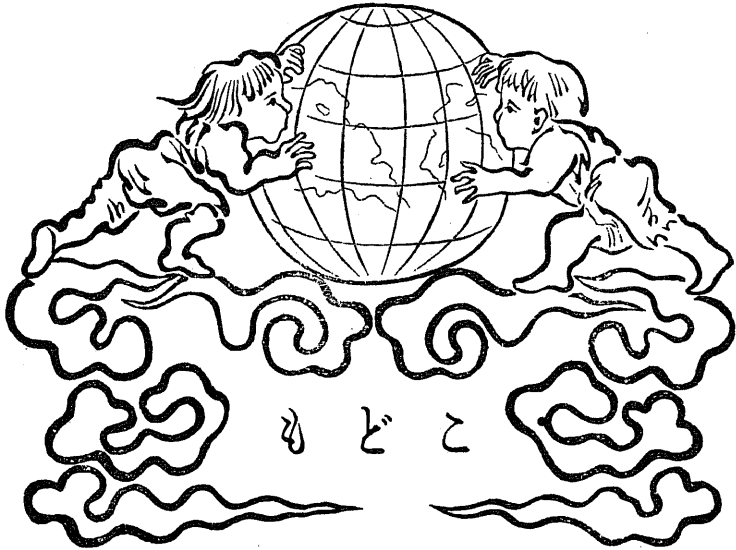


も ち と 人 婦
 號 二 十 第 卷 貳 第



お 姫 様 の 行 方 (ついで)

やまとの翁

免してくれよば、お姫様の
 の居所を知らしてやる、と
 いったもんですから、少し
 指尖をゆるめてやった所が、
 其小人のゆーにわ
 一体、私わ、地面の底に
 住んで居る一寸法師なんで
 すが、地の中には、私見た
 様な小さな人間が、まだ澤

山居ります。ですから、あの三人のお姫様の居る所も、私には
 ちゃんと分つて居ます。夫わ深いといつたら、ほんとに深い、
 深い地面の底に居られるので、恐ろしい、頭の澤山ある大蛇が
 お姫様を一人づゝ張番して居ます。そこえ行くには、深い空井
 から、籠に乗つて降りて行くのですが、屹度、刀を抜いて持つ
 て行かねばなりません。

こゝいつて置いて、その小人わ、どこえとなく消えて失くな
 りました。そこえ二人の兄さん等が、歸つて來ましたから、弟
 わ小人から聞いた話をして、夫から、三人連れ立つて、其空井
 の所え出かけました。

さし、誰から先きに、井の中え這入ろかとゆゝ事になつて

又籤をひいた所が、一番年上の兄さんが、先に這入ることになりました。そこで、大きな鈴を片々の手に持って、兄さんが籠の中に這入ると、上から、二人が綱で以て下ろす。若し降りて行って何か危い事があると、下から鈴を鳴らすから、夫を合圖に急いで引き上げるとゆる約束なのです。

やっさ、やっさとゆる懸聲で、上から降ろして行きましたが、暫らくすると、ちりん、ちりん、ちりくちりんといつて、下から烈しく鈴が鳴ったから、さー大變だ。引き上げよとゆるので、上の二人がやっさく、と一生懸命で引き上げました。所が兄さんわ、顔色を眞青にして上って来て、下わ眞闇で、何だか氣味の悪いものが居て、とても底まで下りて行けぬとゆるので

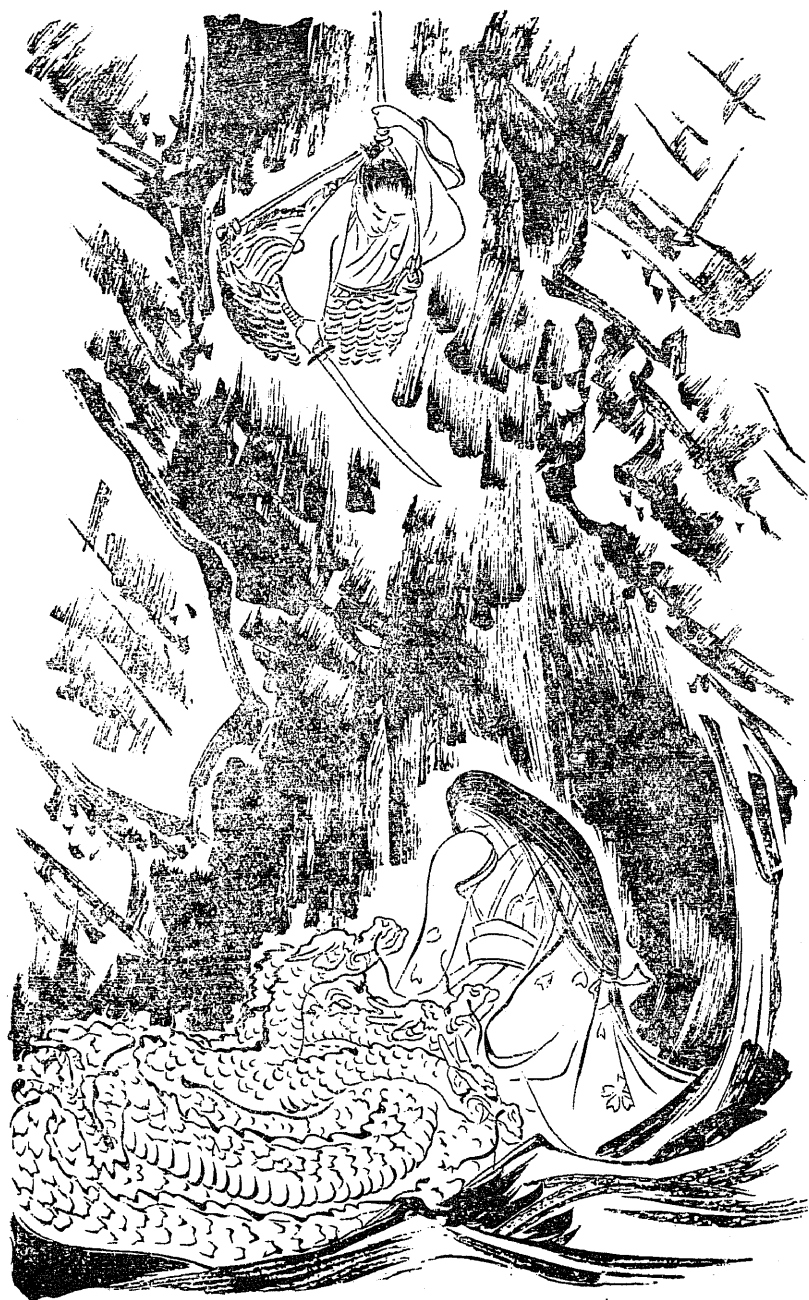
す。

夫おとこから、今こん度は、二に番ばん目の兄にいさんが降りて行いった所ところが、行いく
と間まもなく鈴かねがなつて、これも引ひき上あげられました。

さて、一いち番ばんお仕舞しになつて、いよゝゝ弟にいが、降りて行いく事ことに
なりましたが、弟にいわ、何なにんでも、地面ちめんの底そこまで行いつて、お姫ひめ様さま
をお助すけけ申まうさんければならぬとゆゝ考かんで、十じゅう分ぶん仕度しどをして、降り
て行いきました。さて、だんゝ降りて行いくとゆゝと、下したは丸まるで
眞闇まゝくらで、何なにともいえない變へんな臭においなどがする、氣分きぶんが何なにんだか變へん
になつて來くる、けれどもそんな事ことに構かまわないで、とゝゝ底そこえ
降りて行いきました。

そゝすると、地面ちめんの中なかわ極ごく々々靜しずかで、少ましも音ねなどは聞きえま

せんけれど、たゞ時々向うの方から、冷たい風がひゅーと吹いて来て、其風の冷たい事といったら、丸で身體が切れ相に思う位です。そーして其風が吹いてくると夫と一所に、ごーッごーッとゆー恐ろしい音が聞えます。『ハテこれこそ大蛇のうなり聲だな』と思いましたが、そこで小人から言ー付かった通り、腰の刀を抜いて、其柄をシツカリ握って、そーっと岩の壁の隙間から窺いて見ると、まー可愛相じやありませんか、一人のお姫様がまことに、悲しい、悲しい顔をして、ちゃーんと座って居らつしやると、其側に、頭の五もある大蛇がのたくって居て、其の頭をお姫様の膝の上に、のせかけて居るのです。



これを見た弟わ、もーじつとしては居りません。いきなり岩の隙間から、飛び込んで行きました所が、其大蛇が恐ろしい頭を五つながら、持ち上げて、火の様の舌を吐き出しながらやつて来ましたから、弟わ手に持った刀で以て、五つの頭を残らず切り落として仕舞いました。すると、お姫様わ、夢だと思いう位お喜ひになつて、弟の膝にもたれて、涙を流して泣いて居りました。

さー、一人わ助けたが、これからまだ、お二人を助けなければならぬとゆーので、弟わお姫様をそこに残して置いて、だんく奥の方へと進んで行きました。そーすると、二番目のお姫様の所には頭の六つある大蛇が居るし、三番目のお姫様の所に

わ頭の七つある大蛇が居て、番して居ったのでしたが、弟わ少しも恐れなくて、一々其頭を切り落として、とーく三人残らず助けました。

三人のお姫様たちわ、可愛相にお父っさんの言一付けを守らなかつた爲に、永い間地面の底で、あんな恐ろしい大蛇に番をせられて、もーとても人間なぞにわ、一生遭うことが出来ないと思つて、泣いて許り居らした所え、不思議にもこの豪い人に助けられたもんですから、其喜び様といつたら、中々筆でも口でも言ふことが出来ない位であつたのです。

そこで、これから、このお姫様たちを一人づゝ地面の上え上げなければならぬとゆーので、まづ一人のお姫様を、籠の中え

入れて、下からちりーんと鈴をならしめすと、『そーら、来た』
 とゆーので、上から引き上げる。そして空虚の籠を下ろして來
 ると、下から又一一人のお姫様を入れて鈴をならす、又引き上
 げる、又下ろしてくる、又入れて鈴をならす、又引き上げる、
 とーくか様にして、みんな残らずお姫様を上え上げて仕まいま
 した。

さて夫から、今度わ自分が上って行く番になったもんですか
 ら、自分で籠の中には入って、鈴をならしめました所が、上の二人
 わ『さーこれでもーお仕舞いだ』とゆーので、『エンヤラヤッ、エ
 ンヤラヤッ』といって力任せに引き上げにかゝりました。所が
 もー二三間で地面え出よーといふ時になつて、どーしたのか途

中で綱が、ブツツリと切れたから、堪らない、可愛相に、何百
 間だか底の知れない、深い地面の中え、『ドシン』とゆゝ音と
 共に又落っこちて仕舞いました。

上の二人は、屹驚仰天した。『折角お姫様を三人ながら助け上
 げてこゝで、肝心の弟を死なしてわ大變だ』とゆゝので、大騒
 ぎをしたけれど、も一仕方がない。どししたって、切れた綱を
 つなぐ譯にわ行かないし、他に助ける工夫もないから、泣く
 止めにして、お姫様三人を、お連れも一して、一度お城え歸る
 ことに決めました。

さて、弟の方でわ、高い高い地面の上から落っこつたにわ
 落っこつたのでしたが、ま一夫でもよかつた事にわ、別に大

變な怪我もしなかつたから、死にもしないので、無事に下で助か
ったのです。けれど、困った事にわ、地面の上に乗ることが
出来ない。眞闇な所で、たった一人、何時までも寂しくく
暮らして居んければならないかと思うと、もー困ってく〜いっ
そ、泣き出したいたい位になりました。『あー、こーして、己わ一人
で死んで仕舞わんければならぬか』と思いながら、ひよつと
周囲を見た所が、不思議にも、笛が一本落ちて居る。『はて、之
わ、お姫様が置いて居った笛か知らん、せめて之でも吹いて
氣を慰めて見よ』と、口宛て、一息吹いた所が
これわ奇妙！どこからとなく、前に出遭ったと同じ様な小人
が、一度に何十人となく躍り出して來た。『妙だな』と思つて

又吹く 又何十人となく出て来る、又吹く、又出るとゆゝので
 小人の數は何千人とゆゝ程にもなつて、大方地面の底一杯に塞
 った位、弟わ『これわ奇態だ』と思つて居ると、小人わ 口々
 に『お前わ 何が一番の願だ』といつて聞きますから、『私わ
 地面の上の上つて行きたいのだ』と答えますると、其言葉が
 終るか終らない中に、何千人とも知れない小人わ、弟の頭を引
 っぱりやら 尻を押し上るやら 足を持つやら大騒ぎを始めて
 と一く 弟を地面の上の押し出しました。
 さて、弟わ、小人のお蔭で、不思議に命を助かつて、地面の
 底から上つて來ましたから、大喜びで以て すたくと走つて
 お城え行つて見ますと、二人の兄さん等わ 丁度お姫様を送つ

てお城に着いた所であつて、王様とお姫様が出て来たところの
 で、それわく大變な喜びで城の中でお大祝いが始まつ
 た所だったので。そこへ又死んだと思つた弟も出て来たか
 ら、二人の兄さんも『これわく』といつて二度吃驚して喜
 んだ。

そこで、王様はこの三人の兄弟の忠義な働きを感心して、い
 ろくなど褒美を下さるし、お姫様からも、澤山など褒美があ
 つて、それから、この三人わいつまでも王様の忠義な家
 來となつて、仕えましたが、夫からとゆゝものわ、お姫様たち
 わ、決してく林檎の實など、黙つてちぎりませなんだとさ。
 めでたしく